

調剤報酬請求事務専門士検定試験結果
に関する一考察

A Study on the Results of the Dispensing Compensation
Claim Clerk Examination

岩下 淳子

IWASHITA Junko

調剤報酬請求事務専門士検定試験結果 に関する一考察

A Study on the Results of the Dispensing Compensation Claim Clerk Examination

岩下 淳子

IWASHITA Junko

要旨：調剤報酬請求事務専門士検定試験の結果について調査・分析を行った。S短期大学の合格率は全国平均を上回っており、さらに、学科試験および実技試験における正解率に関する分析結果から特に学科試験においては成績向上が見られ、実技試験においては以前から継続して成績良好であることがわかった。また、最近の検定試験において学科試験および実技試験の各々出題内容別に試験結果を分析し、調剤報酬改定も考慮した出題内容と正解率の関係等について考察した。

キーワード：調剤報酬請求事務専門士、検定試験、受験状況、試験結果、調剤事務

1. はじめに

S短期大学では、専門士検定協会主催の調剤報酬請求事務専門士検定試験を採用しており、2017年以降の合格率は、受験者が2～3名と極端に低い年を除いて、概ね毎年全国平均を上回っている。検定試験は学科試験と実技試験に分かれ、それぞれ合格点が定められている。合格点は毎年同じではないが、3級は学科試験および実技試験ともに15点以上であることがほとんどである。合格率は高いものの、毎年不合格者が1～2名存在する。そこで、学科試験および実技試験において結果分析を行い、今後の合格率をさらに上げるためには何が必要であるかを調査した。また、最近の検定試験において学科試験および実技試験の各々出題内容別に試験結果を分析し、調剤報酬改定も考慮した出題内容と正解率の関係等について考察した。なお、学科試験においては万遍なく知識を習得することを目的として実施されており、出題範囲は多岐にわたる。これに

対し、実技試験においては調剤報酬算定を重視しており、項目を絞って出題される。そこで、学科試験および実技試験における出題率と正解率について出題内容項目ごとに調査を行った。

2. 調剤報酬請求事務専門士検定試験結果の推移

2.1 受験状況について

表1は調剤報酬請求事務専門士検定試験の受験状況を示したものである。2016年度生、2017年度生、2018年度生は1年次秋学期から2年次春学期までの8ヶ月間学び、2年次7月に受験しており、31回、33回、35回検定試験を受験している。36回受験者2名は医療系コース以外の学生で薬局に就職を希望し2年次から学び8ヶ月後に受験した例外的な学生である。2019年度生は1年次春学期から2年次春学期までの長期間に及ぶ授業となったため、8ヶ月後の36回検定試験受験を希望する学生はおらず、全員15ヶ月後の37回検定試験受験を希望した。しかし、2020年実施の37回検定試験は、新型コロナウイルス感染拡大により受験月がずれ込み、かつ、日程が定まらない等の理由から、受験者9名となり、38回検定試験の受験に10名が先延ばしする結果となった。2020年度生は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、入学時より一時期オンライン授業を受けることを余儀なくされた学生である。2020年度生は1年次春学期から学ぶため、8ヶ月後の12月に実施される38回検定試験受験も可能であったが、学生は15ヶ月後に実施される39回受験を希望した。新型コロナウイルス感染拡大により対面授業を受けていない時期があったことへの不安も影響したようである。2021年度生は1年次春学期から1年次秋学期まで学び8ヶ月後に多くの学生が40回検定試験を受験した。2022年度生は1年次春学期から対面授業を受け、1年次秋学期までの8ヶ月後に42回検定試験を受験した。

図1はS短期大学における受験者数、合格者数、合格率および全国平均合格率の推移を示したものである。図1(a)は受験者数と合格者数を比較しているが、毎回ほぼ一致しており不合格者はわずかであることがわかる。また、図1(b)はS短期大学と全国平均の合格率の比較であるが、受験者数が少ない36回受験が全国平均を大きく下回っている。この36回受験者2名は、前述したように医療系コース以外の学生で、2年次から薬局に就職を希望し学び始めた例外的な学生である。医療系コース以外の学生は医療事務の学習をしていないため、薬剤料計算や法規等を習得していない。36回受験以外の合格率を見ると、同様に受験者数の少ない41回受験は全国平均をわずかに下回るが、他は全国平均を上回っている。

表1 調剤報酬請求事務専門士検定試験の受験状況

実施回	実施年	実施月	受験者	受験前期間	受験者数	合格者数
31	2017	7	2016年度生	8ヶ月	44	43
32	2017	12	—	—	0	0
33	2018	7	2017年度生	8ヶ月	22	20
34	2018	12	—	—	0	0
35	2019	7	2018年度生	8ヶ月	22	21
36	2019	12	2018年度生	8ヶ月	2	1
37	2020	9	2019年度生	17ヶ月	9	9
38	2021	2	2019年度生	22ヶ月	10	8
39	2021	7	2020年度生	15ヶ月	26	25
40	2021	12	2021年度生	8ヶ月	35	34
41	2022	7	2021年度生	15ヶ月	3	2
42	2022	12	2022年度生	8ヶ月	19	18

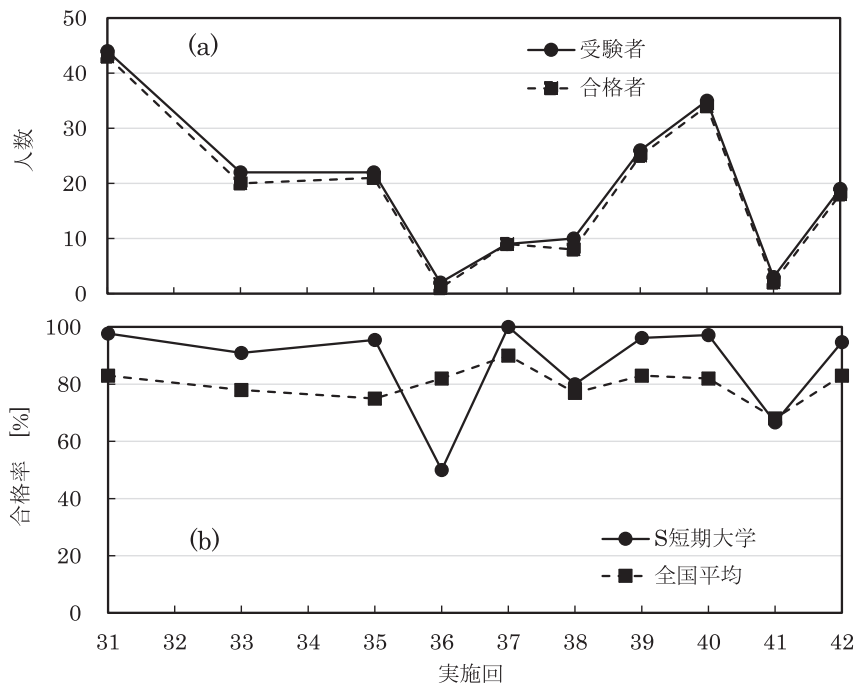


図1 受験者数、合格者数、合格率および全国平均合格率の推移

2.2 試験結果について

図2は学科試験および実技試験におけるS短期大学受験者の平均正解率、最高正解率、最低正解率および正解率の変動係数（＝標準偏差／平均）の推移を示したものである。37回検定試験は新型コロナウイルス感染拡大のため学内受験を実施できなかった。また、36回検定試験と41回検定試験も受験者数が極端に少ないため除外した。

図2（a）は学科試験および実技試験における平均正解率を示している。38回検定試験は2020年度調剤報酬改定後に実施された試験であるが、学科試験と実技試験の正解率の差が最も大きく、学科試験の平均正解率が最も低い。逆に、33回検定試験と42回検定試験は学科試験と実技試験の正解率の差が最も小さく、さらに、42回検定試験は学科試験と実技試験ともに平均正解率が高い。

図2（b）は学科試験および実技試験における最高正解率、最低正解率を、また、図2（c）は正解率の変動係数を示している。図2（b）と図2（c）を見ると、学科試験は実施回数によって学生の習熟度にばらつきがあることがわかる。学科試験は、35回検定試験と42回検定試験が最も変動係数が低いことから、この2回が全体の習熟度が高かったといえる。逆に33回検定試験と38回検定試験は変動係数が高いことから学生によって習熟度にばらつきがあったことがわかる。実技試験は、学科試験と比べて33回実施試験以降の変動係数の差が小さい。38回検定試験と39回検定試験は変動係数が低いことから学生の習熟度にばらつきが小さいことがわかる。逆に33回検定試験と42回検定試験は変動係数が高いことから学生の習熟度にばらつきがあることがわかる。

図3は学科試験における正解率分布の推移を、図4は実技試験における正解率分布の推移をそれぞれ示したものである。学科試験、実技試験ともに30点満点の試験で、ほぼ毎回合格点数は15点以上である。そこで、合格ラインを基準とし、正解率を50%未満、50%～65%未満、65%～80%未満、80%以上の4つに分類してその推移を分析した。学科試験と実技試験を比較すると実技試験の習熟度が高く、特に正解率80%以上の学生が多い。しかしながら、正解率50%未満の学生も学科試験、実技試験ともに一定数存在する。また、図3の学科試験結果における特徴として、正解率80%以上の比率が42回検定試験で突出して高いことが挙げられる。その他、38回検定試験は正解率80%以上の比率が低く、65%未満の比率が目立っている。一方、図4の実技試験結果における特徴は、全体的に正解率80%以上の比率が高く、さらに35回検定試験以降は正解率65%以上の比率が高い点である。なお、33回検定試験の正解率が低く見えるが、33回実技試験の合格点数は12点であったため、正解率50%未満の2名も合格点数を満たしている。33回は試験問題の難度が高く平均正解率を引き下げたが、習熟度は他の年と比較して低いとはいえない。したがって、

31回以降の実技試験結果においてはいずれも高い習熟度を維持していると考えられる。

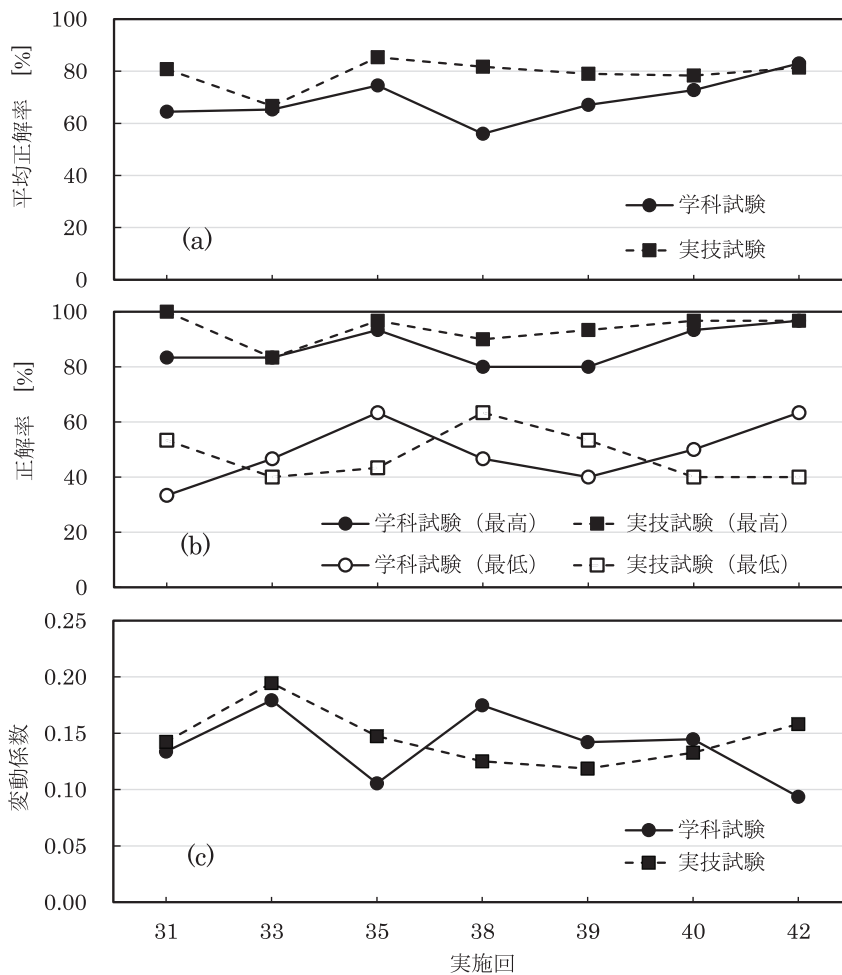


図2 学科試験および実技試験における平均正解率、最高正解率、最低正解率および正解率の変動係数の推移

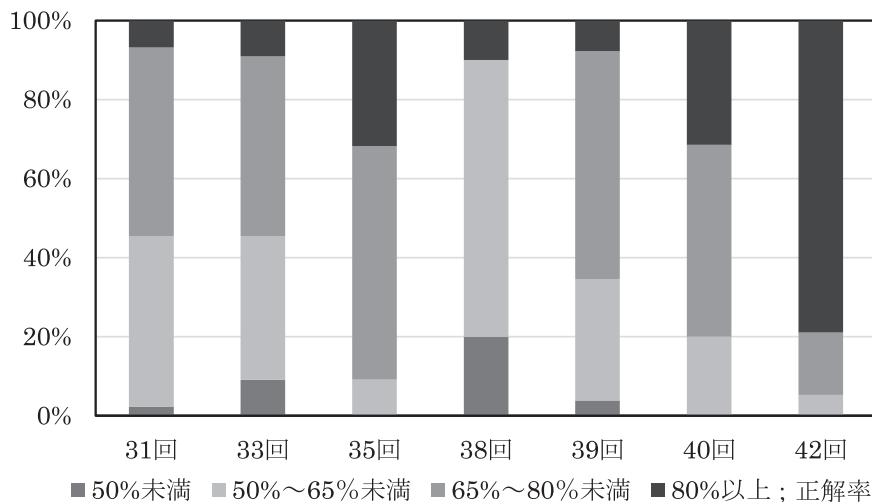


図3 学科試験における正解率分布の推移

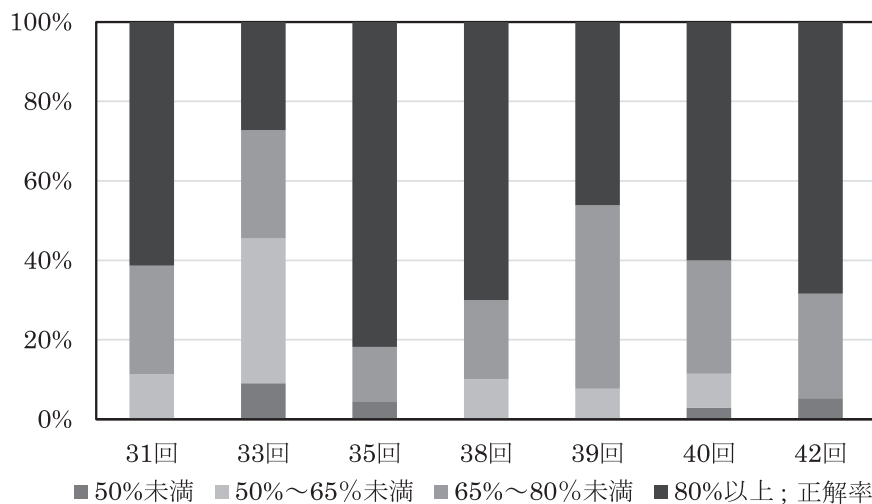


図4 実技試験における正解率分布の推移

2.3 まとめ

調剤報酬請求事務専門士検定試験の受験結果を整理したところ、33回検定試験および42回検定試験では、いずれも学科試験と実技試験の成績は僅差であったが、33回検定試験では学科試験および実技試験両方の成績にばらつきが見られ、42回検定試験では学科試験において成績のばらつきはないものの実技試験では成績に大きなばらつきが見られた。これは、42回学科試験に50%未満の正解率は存在しないが、42回実技試験には50%未満の正解率が存在し、さらに、50%~65%未満の正解率が存在しないことが、実技試験に関する習熟度のばらつきの大きさにつながったと考えられる。

38回検定試験では学科試験と実技試験の成績差が最も大きくなった。なお、他の実施回と比較してみると、学科試験成績のばらつきが最も大きく、実技試験成績のばらつきに大きな差はなかった。

3. 調剤報酬請求事務専門士検定試験結果の分析

3.1 検定試験の出題内容分類について

これまで、31~42回の調剤報酬請求事務専門士検定試験における受験結果を整理し、その傾向等について検討した。ところで、岩下（2023）にも記したように、調剤報酬改定は2020年度の改定から大きく変化し始め、2022年度は調剤報酬において過去稀に見る大型改定が行われた。そこで、この改定の前後に該当する40回検定試験と42回検定試験の結果において、改定内容との関係性にも着目した学生の習熟度を調査することを目的とし、検定試験問題の出題内容別に試験結果を整理した上で分析を試みた。表2は調剤報酬請求事務専門士検定試験の出題内容分類を示しているが、学科試験および実技試験について、それぞれ出題傾向や改定内容との関連性に基づいて分類している。

表2 調剤報酬請求事務専門士検定試験の出題内容分類

学科試験	実技試験
A：保険薬局と保険調剤	
B：薬剤調製料・調剤管理料と加算	B：薬剤調製料・調剤管理料と加算
C：調剤基本料と加算	C：調剤基本料と加算
D：薬学管理料と加算	D：薬学管理料と加算
E：薬剤料・特定保険医療材料料	E：薬剤料・特定保険医療材料料
F：医療制度	
G：接遇	
	H：レセプト記載・その他

3.2 学科試験結果

図5は、40回、42回検定試験の学科試験における出題内容別試験結果を示したものである。なお、図5(a)～(e)は、(a)平均正解率、(b)最高正解率と最低正解率、(c)変動係数、(d)出題率、(e)調剤報酬改定関連出題率を図示している。

図5(a)は、40回、42回検定試験の学科試験における平均正解率を示したものである。平均正解率はさほど大きな差がない項目が多いが、E：薬剤料・特定保険医療材料料は最も差が大きく、20%以上開いている。一方、A：保険薬局と保険調剤、C：調剤基本料と加算、F：医療制度はほとんど差が見られない。

図5(b)は、40回、42回検定試験の学科試験における最高正解率と最低正解率を示したものである。最も特徴が見られるのは40回検定試験の最低正解率である。40回の最低正解率は変動が大きく、項目ごとの差が目立つ。特にA：保険薬局と保険調剤、D：薬学管理料と加算の正解率が極めて低い。一方、40回の最高正解率は平均して高いため、40回の最高正解率と最低正解率を比較すると項目によってその差が極めて大きい。また、42回検定試験は40回検定試験と比較すると最高正解率と最低正解率の差は小さいが、A：保険薬局と保険調剤、F：医療制度の差は大きい。40回、42回検定試験で共通して差が大きい項目はA：保険薬局と保険調剤である。

図5(c)は、40回、42回検定試験の学科試験における正解率の変動係数を示したものである。40回検定試験の項目による差が目立つが、特にA：保険薬局と保険調剤、B：薬剤調製料・調剤管理料と加算、D：薬学管理料と加算は変動係数が高く、問題により正解率の差が大きい。一方、42回検定試験は比較すると項目による差はそれほど大きくない。しかし、A：保険薬局と保険調剤、F：医療制度は変動係数が高いことから問題により正解率のばらつきが大きいことがわかる。

また、40回、42回検定試験ともにC：調剤基本料と加算、E：薬剤料・特定保険医療材料料、G：接遇の項目はどの問題も平均的な正解率である。

図5（d）は、40回、42回検定試験の学科試験における出題率を示している。40回、42回検定試験ともに最も高い項目はD：薬学管理料と加算であり、次いでA：保険薬局と保険調剤が続いている。逆に最も低い項目はE：薬剤料・特定保険医療材料料とG：接遇である。

図5（e）は、40回、42回検定試験の学科試験における調剤報酬改定に関連した出題率を示している。40回、42回検定試験は2022年度調剤報酬改定前後に実施されており、その影響を大きく受けた項目がある。すなわち、B：薬剤調製料・調剤管理料と加算、C：調剤基本料と加算、D：薬学管理料と加算の3項目は2022年度調剤報酬改定後に出現率が高くなっている。

以上のように、学科試験は、40回検定試験と42回検定試験の平均正解率は一致しておらず、40回実施試験では薬学管理料と加算、42回実施試験では薬剤料・特定保険医療材料料の平均正解率が低い。その他、概ねどの項目も平均正解率は高く、習得できている。しかし、保険薬局と保険調剤の40回、42回検定試験、薬剤調製料・調剤管理料と加算の40回検定試験で平均正解率は高いが学生全体の習熟度にはばらつきがあるといえる。40回検定試験と42回検定試験では調剤報酬改定前後での受験という大きな違いがあるが、薬剤料・保険医療材料料以外では42回検定試験の成績が40回検定試験の結果と同程度もしくは上回っており、調剤報酬改定は学科試験においてさほど影響を及ぼしていない。また、学科試験は全体的に万遍なく理解することが得点率につながるため、広く知識を身に付けることが求められる。そのため、学習は繰り返し過去問題を解答し覚えることが中心になる。前述の学科試験結果から、成績は概ね良好で学習成果を十分得られているといえる。また、学科問題は文章問題であるため、読解力を求められる問題もある。そのため、同じ項目の中でも難易度が異なり、覚えることが苦手な学生だけでなく読解力の低い学生も習熟に時間を要する。

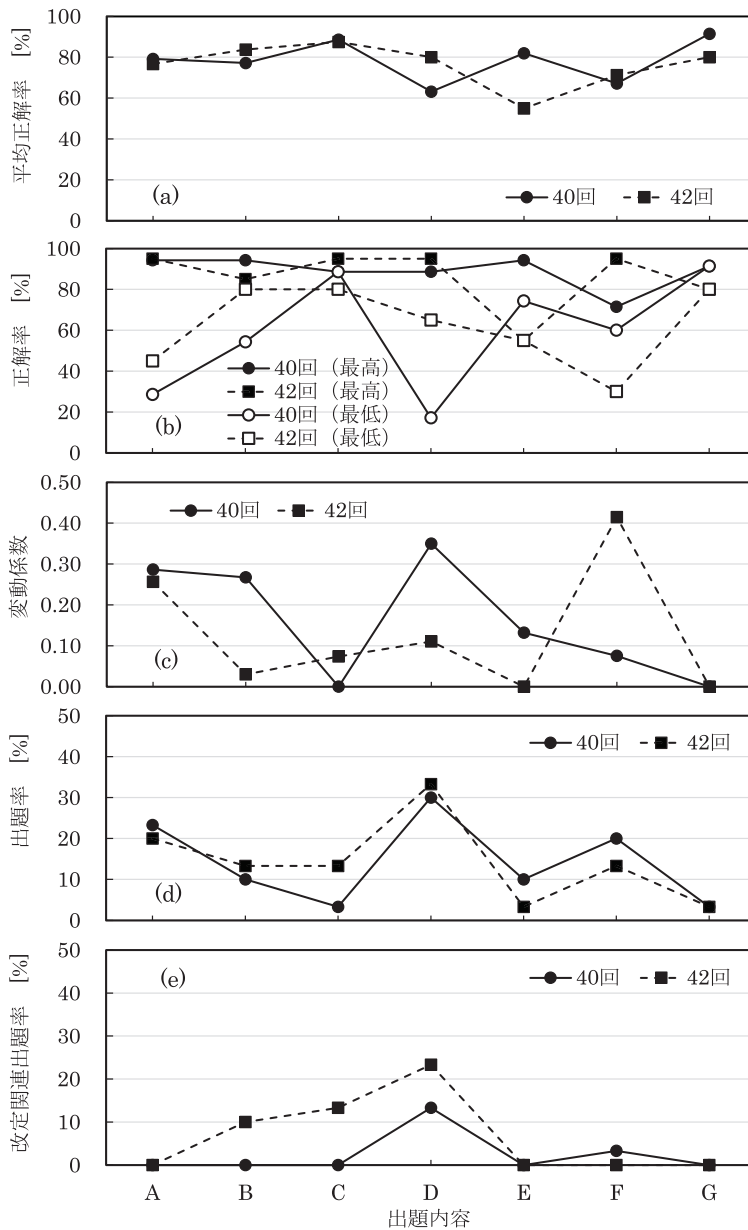


図5 40回、42回検定試験の学科試験における出題内容別試験結果
 A：保険薬局と保険調剤，B：薬剤調製料・調剤管理料と加算
 C：調剤基本料と加算，D：薬学管理料と加算
 E：薬剤料・特定保険医療材料料，F：医療制度，G：接遇

3.3 実技試験結果

実技試験では学科試験と一致しない項目があるが、習熟度を確認する内容・目的に違いがあるためである。学科試験においては万遍なく知識を習得することを目的としているため出題範囲が広いが、実技試験においては算定を重視するため出題範囲は狭い。そのため、学科試験には出題されるが、実技試験には出題されない項目があり、さらに、実技試験特有の問題もある。したがって、実技試験の項目は学科試験の項目と完全一致していない。

図6は、40回、42回検定試験の実技試験における出題内容別試験結果を示したものである。なお、図6(a)～(e)は、(a)平均正解率、(b)最高正解率と最低正解率、(c)変動係数、(d)出題率、(e)調剤報酬改定関連出題率を図示している。

図6(a)は、40回、42回検定試験の実技試験における平均正解率を示している。40回、42回検定試験ともにD：薬学管理料と加算は60%と40%であり非常に低く、40回検定試験はH：レセプト記載・その他は50%に満たないが、その他の項目はいずれも80%前後と高いことがわかる。

図6(b)は、40回、42回検定試験の実技試験における最高正解率と最低正解率を示している。最も特徴が見られるのは40回、42回検定試験ともにB：薬剤調製料・調剤管理料と加算の項目における最高正解率と最低正解率の差である。この項目Bは平均正解率が高いけれども最高正解率と最低正解率の差が大きい。また、D：薬学管理料と加算は40回検定試験の最高正解率と最低正解率の差が大きい、42回検定試験のその差はない。逆に、C：調剤基本料と加算、E：薬剤料・特定保険医療材料料は平均正解率が高く、最高正解率と最低正解率の差が小さい。

図6(c)は、40回、42回検定試験の実技試験における正解率の変動係数を示している。最も特徴がある項目はD：薬学管理料と加算である。40回検定試験のD：薬学管理料と加算は変動係数が最も高く習熟度のばらつきが大きい。一方、42回検定試験のD：薬学管理料と加算は変動係数が最も低く習熟度のばらつきが見られない。また、B：薬剤調製料・調剤管理料と加算は40回、42回検定試験ともに変動係数が高く習熟度のばらつきが大きい。

図6(d)は、40回、42回検定試験の実技試験における出題率を示している。最も特徴がある項目はB：薬剤調製料・調剤管理料と加算である。40回、42回検定試験ともに、B：薬剤調製料・調剤管理料と加算は出題率70%と突出して高いが、その他の項目はいずれも出題率10%前後である。

図6(e)は、40回、42回検定試験の実技試験における調剤報酬改定関連出題率を示している。40回と42回検定試験で異なり、42回検定試験のB：薬剤調製料・調剤管理料と加算のみ出題率70%と突出して高く、その他の項目はいずれも出題率10%前後である。

以上のように、実技試験は、40回検定試験と42回検定試験の平均正解率はほぼ一致しており、薬学管理料と加算の平均正解率が低い。また、40回検定試験では学生全体の習熟度にばらつきが見られ、理解できていない問題や理解できていない学生がいることがわかる。これに対し、42回検定試験は学生全体の習熟度が比較的低い。しかし、レセプト記載・その他の項目においては平均正解率が高く、理解できている。前述した通り、40回検定試験と42回検定試験は調剤報酬改定を挟んで実施され、この改定が近年稀に見る大型改定であることから、42回検定試験受験者は特に改定に影響のあった薬剤調製料・調剤管理料と加算を重点的に学習した。そのため、42回検定試験の薬剤調製料・調剤管理料と加算は40回検定試験と同様に好成績であった。また、薬剤調製料・調剤管理料と加算は改定以前から他項目より難度が高い。そのため平均正解率は高いけれども、習熟度にばらつきが生じる。さらに、薬剤調製料・調剤管理料と加算は出題率が高いことから入念に学習するため、その他の項目の学習が手薄となると考えられる。その他、薬学管理料と加算は調剤基本料と加算と比較すると、難度を高いと感じる学生が多い。これは、授業で繰り返し算定する基本的な問題は解答できるが、出題頻度の少ない加算の問題は解答できないという事情を反映していると考えられる。

3.4 まとめ

調剤報酬請求事務専門士検定試験問題の出題内容別に試験結果を整理・分析を行ったが、学科試験、実技試験に共通していることは、薬剤調製料・調剤管理料と加算、調剤基本料と加算の平均正解率が高いことである。学生に苦手意識が多く見られる薬剤調製料・調剤管理料と加算は難度が高いが、反復学習することで良好な結果が得られたようである。しかし、薬剤調製料・調剤管理料と加算の実技試験においては出題範囲が広く難度も高いため、簡単な問題は解答できても難度の高い問題は解答できない学生がいることが正解率のばらつきにつながった。

40回検定試験の学科試験と実技試験は、薬剤調製料・調剤管理料と加算、調剤基本料と加算、薬学管理料と加算、薬剤料・特定保険医療材料料の共通するすべての問題において平均正解率が一致している。したがって、各項目についてバランスよく学習できており、知識も習得し実技も伴っているといえるが、不得意な項目は学科試験と実技試験のいずれにおいても共通する課題となっている。

42回検定試験の学科試験と実技試験は、調剤基本料と加算のみにおいて平均正解率が一致しており、薬学管理料と加算、薬剤料・特定保険医療材料料の平均正解率は異なる結果になった。

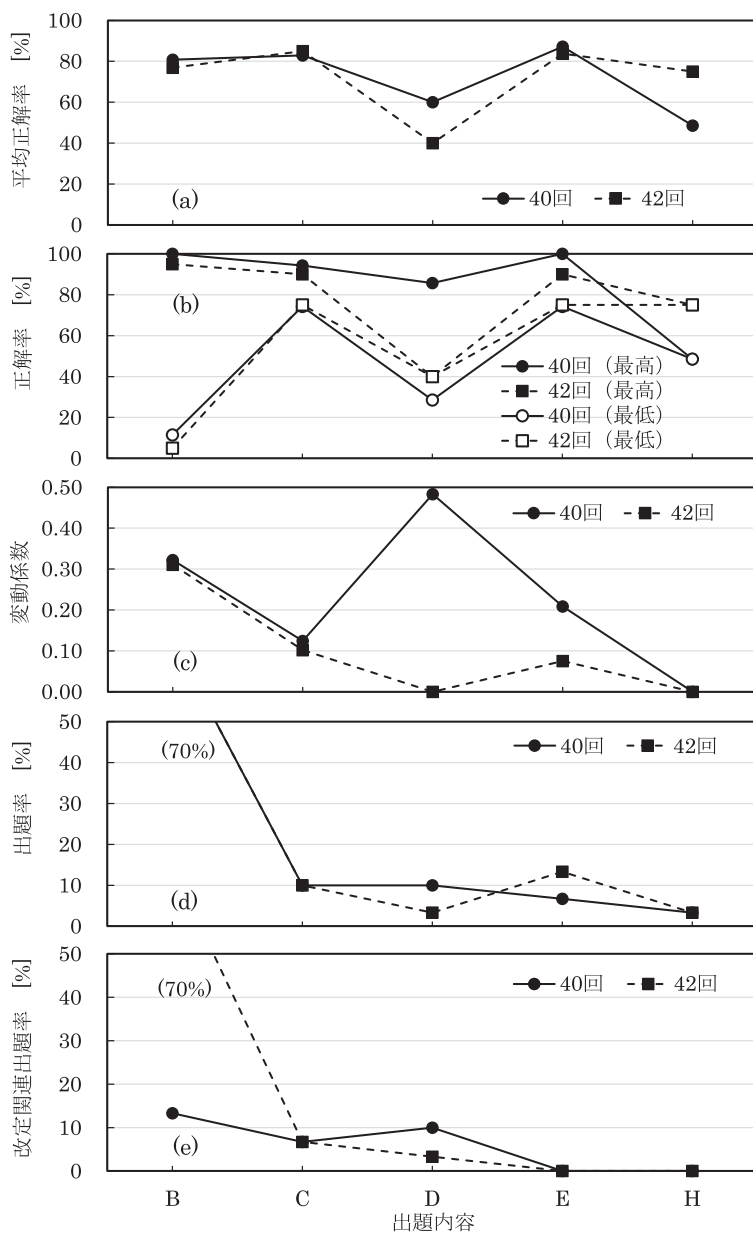


図6 40回、42回検定試験の実技試験における出題内容別試験結果
 B：薬剤調製料・調剤管理料と加算，C：調剤基本料と加算，
 D：薬学管理料と加算，E：薬剤料・特定保険医療材料料，
 H：レセプト記載・その他

すなわち、学科試験で正解率が高い薬学管理料と加算は、実技試験では正解率が低く、学科試験で正解率が低い薬剤料・特定保険医療材料料は、実技試験では正解率が高い。偏った成績であるといえるが、学科試験と実技試験のいずれか片方は理解できており、学習次第で伸びる可能性は高いと考えられる。

4. おわりに

調剤報酬請求事務専門士検定試験における学科試験および実技試験の正解率は、比較すると圧倒的に実技試験の正解率が高い。実技試験対策は授業でも多くの時間を費やしており、十分な学習時間が良好な試験結果に結びついている。一方、学科試験対策については今後の課題であるが、近年の試験結果において正解率は上昇しており、特に42回学科試験の正解率はかなり高く80%以上正解率の割合が過去最高であり、この成績を維持していくことが期待される。

新型コロナウイルス感染拡大の影響は非常に大きく、2019年度生と2020年度生の検定試験平均正解率にも大きな影響を及ぼしたといえる。2019年度生と2020年度生が受験した37回、38回、39回検定試験の合格率は他の年と変わりなく全国平均を上回っているが、学科試験の平均正解率は38回が最も低かった。さらに、2019年度生と2020年度生は17ヶ月、22ヶ月、15ヶ月と学習開始から受験までの期間が長期になり過ぎて、学習効率を下げる結果につながったようである。特に38回検定試験は、新型コロナウイルス感染拡大による受験日の延期等もその結果に影響したと考えられる。

また、2022年度に大型調剤報酬改定があったことから、40回と42回検定試験を項目別に比較したところ、40回検定試験は学科試験で得意な項目と実技試験で得意な項目が一致し、実技試験と学科試験の項目別習熟度が一致していたようであるが、42回検定試験は一致する項目は一つのみであった。そして、42回検定試験は、学科試験、実技試験ともに平均正解率が高いため、全体的な習熟度は高いが、学科試験、実技試験においてそれぞれ苦手な項目が異なり、かつ、その苦手な項目を皆同じく苦手に行っている結果となっている。これは、調剤報酬改定により特定の項目の難度が上がることを想定し、その項目を重点的に学習した結果、その他の項目の学習が手薄になったことが原因であると考えられる。

さらに、2022年度に実施された大型調剤報酬改定は、学科試験以上に実技試験へ大きく影響した。実技試験における出題率は大きな違いがあり、薬剤調製料・調剤管理料と加算が他と比較し

て極端に多く、さらに、改定関連出題率も同様である。今後しばらく、このような大型改定を実施する可能性は低いかもしれないが、実技試験における薬剤調製料・調剤管理料と加算の難度と出題率の高さは変わらないと推測される。したがって、今後も実技試験に比重を置いて学習する必要があり、薬剤調製料・調剤管理料と加算を十分に学習する必要があるが、一方で学科試験対策学習がおろそかにならないよう工夫することも必要である。

参考文献

岩下淳子「調剤報酬請求事務専門士検定試験の出題傾向に調剤報酬改定が及ぼす影響」『埼玉女子短期大学研究紀要』第48号，2023，pp.31-45.

調剤報酬請求事務専門士検定協会編『調剤報酬請求事務専門士 公式テキスト 第18版（令和4年4月調剤報酬改定版）』日本医療総合支援評議会，2022年5月

調剤報酬請求事務専門士検定協会編『調剤報酬請求事務専門士 処方箋問題集 第17版（令和4年4月調剤報酬改定版）』日本医療総合支援評議会，2022年6月

